

## 2006年度 森村・川村ゼミ議事録

4月12日分

記入者：豊島典明

司会者：森村修先生

文献：指定なし

発表グループ：鯨井、豊島、元島

### 連絡事項および決定事項

#### ・役員の決定

ゼミ長：小川

副ゼミ長：桑原

FBS担当：佐藤、田中

渉外：池戸、小原

IT：小林

#### ・スローガン

Be Active! Be Positive!

### 議題

なぜ未だにフルクサスは注目されるのか。

今日再演されるのはなぜか。

### グループの考察

フルクサスがチャレンジした「芸術」の枠や権威が崩壊しつつある今、エンターテインメントとしてのフルクサスに魅力を感じているのではないか。

### 議論の展開

#### ・アウラとは何か

一回性。フルクサスにおいては、コピーではないという一回性というよりは、永遠性としてアウラという言葉が適用されるのではないか。

#### ・フルクサスはプリミティブ

高度でないからこそ、日常といえるのではないか

#### ・オノヨーコのカットピース

primary experience（自分が実際に体験する事）

実際に切る、または見る事により感じる。

結果が予測不可能。だからこそ、緊張感や魅力がある。

#### ・なぜ今フルクサスなのか

フルクサスは生き方なのではないか。また、そこに考える余地を与えるものではない

か。

アートについて、もっと考えてほしいというメッセージではないか

デザインブームなのではないか。

#### 記入者の考察

現代の若者がフルクサスに接した時、そこに「新鮮さ」を感じるであろう。それは、数十年の時を経た事により一種のクラシックの領域に達している証かも知れない。フルクサスの時代のアートに接した事のない世代にとって、フルクサスは新しく感じられ、魅力すら感じるのではないか。しかし、それはエンターテイメントとしての魅力にすぎないように思われる。フルクサスの挑んだアート制度は崩壊しつつあり、人々はそれに対し大きな不満を持っていない。ゆえに、フルクサスの目指した権威の「浄化」剤としての効能は薄れてしまっていると言えるかもしれない。

オノヨーコは現代を「あきらめの時代」と表現する。人々はシステムや権威に対し、不満を持ってそれを壊そうとする勢いを持っていない。そこには彼女の言う「あきらめ」もあるだろうし、それ以前に、不満すら持っていない人が多いのではないだろうか。現代人の「冷めた」一面に対するオノヨーコの寂しさを感じざるをえない。